

はじまりの哲学 要旨

伊吹浩一

本稿は、アルチュセールの哲学を「はじまりの哲学」と位置付けた上で、「はじまり」をめぐるアルチュセールの思索と実践の軌跡を、様々な角度から検討していくことを目的にする。とりわけ、ラカンの精神分析理論のアルチュセールに及ぼした影響に焦点を絞り、考察を進める。

精神分析はアルチュセールの理論活動の「はじまり」の駆動力となり、その後の理論活動全体を通じて大きな参照軸として据えられたが、そこにおけるラカンからの影響は特筆に値する。それは同時に、精神分析は臨床のために創出されたものではあっても、他の領域でも大きな力を発揮する、驚異的に射程の広い理論であることを証している。

しかし、アルチュセールの理論はでその「はじまり」しか示されず、そこからの前進はなされなかった。それゆえ、本稿の目的はアルチュセールが開いた端緒から、それを引き継ぎ、さらなる展開へと歩みを進めることである。とりわけアルチュセールが提起し、解明し切れなかったイデオロギーに関する問題を再度精神分析理論に接合し、徹底的に究明する企てを敢行する。

第一章では、理論活動において自明すぎるあまり見すごされてしまう「読む」という行為をめぐる考察である。アルチュセールはこの「読む」という行為にこだわった。なぜなら、ここに定位しないかぎり、真の「はじまり」はないからだ。そのとき模範となったのがラカンである。ここにアルチュセールとラカン、マルクス主義と精神分析との出会いが実現する。

第二章は、アルチュセールのイデオロギー論についての考察である。アルチュセールのイデオロギー論は多くの思想家に影響を与えることになったが、とりわけ「イデオロギーは物質的な存在を持つ」というテーゼの中で示された、精神に対する身体的行為の優位性はこれまでのわれわれの心身観を根底から覆すことになった。たしかにそうしたことは現実には起こり得るが、しかしなぜ、起こるのか。これを解明するために、アルチュセールがその「はじまり」のみに終始したイデオロギー論と精神分析理論との接合を再度行い、さらなる前進を試みる。

第三章は、前章で身体・行為における行為の問題について考察したことを受けて、身体の問題へと重心を移す。行為のシニフィアン化によってイデオロギーが主体に宿るにしても、なぜ精神ではなく身体を入口にするのか。これを解明するために再び精神分析理論に依拠し、さらにその深部へと入り込む。これは同時に、アルチュセールのイデオロギー論の行き詰り、つまりイデオロギーの強靱さばかりが強調されることになってしまったことの原因の解明にもつながる。

第四章は、アルチュセールの国家論について考察する。社会秩序の維持には不可欠なのが法であるが、法が機能するために重要な役割を担うのがイデオロギーである。さらに、社会構成体は日々生産と再生産を続けねばみずからを維持させることができないが、ここでもまたイデオロギーが重要な役割を果たす。生産活動は労働に従事し得る能力なしには不可能であり、こうした能力を身につけさせるのがイデオロギー装置である。そして資本主義体制が確立・維持されるためには、自由と平等というイデオロギーが自明のものとしてあらねばならない。問題なのは、人間は自由であるとされていて、実際は自由であるとは言い難い。この自由のパラドックスに関してはアルチュセールも気づいてはいたが、

これが生じる原因については究明しなかった。それゆえ、アルチュセールに代わり、この問題についての精神分析を媒介にした究明を試みる。

第五章では理論と実践について考察する。社会変革を標榜するなら、人々の意識を根底から変える理論が必要になる。そこで問題になるのがイデオロギーである。いまあるイデオロギーが未来への跳躍を阻んでいるからである。こうした事態を突き破っていくのが科学であり、認識はつねに科学によって切り拓かれ、哲学はそれを促進する。しかしイデオロギーののりこえは困難をきわめる。アルチュセールはその理由をつきとめられず、それゆえイデオロギーからの離脱の契機をつかめなかった。したがって、ここでもまたアルチュセールに代わり、精神分析を媒介にした解明を試みる。

第六章では、まさにアルチュセールのマルクス主義活動家としての「はじまり」に遡り、その可能性を追求する。その「はじまり」は第二次大戦中の捕虜時代にあり、大戦終結直後の収容所にはコミューン的なものが実現されていた。アルチュセールはそこから共産主義に関する最初のインスピレーションを得た。これ自体は何ら特異なことではなく、マルクス＝エンゲルス以降、コミューン的なものつねに未来社会の参照軸となってきた。社会変革運動にはつねにコミューン的なものが内蔵され、しかもそれは人々を惹きつける。なぜか。コミューン的なものは祝祭的であり、祝祭がひとを魅惑するからである。では、なぜ祝祭は魅力的なのか。これを解明するためにバタイユの思想を経由する。ここで注目すべきは、近年世界各地で巻き起こる民衆闘争であり、そのどれもがコミューン的なものを内包しながら展開されているのだ。この事態を契機にし、コミューン的なものの現代的な可能性と社会変革の展望について、ネグリ＝ハートの現状分析を踏まえながら考察していく。

以上のように本稿の要となる議論は、アルチュセールがマルクス主義の刷新を図るために行ったマルクスの理論とフロイトの理論との接合、とりわけ社会思想の画期となったアルチュセールのイデオロギー論を中心に据えた精神分析的展開の再検討と深化である。その先には、アルチュセール自身が到達し得なかった可能性に満ちた大地が広がっているだろう。この未曾有の領野を切り拓くことに挑戦することが、本稿の目的である。